

いもせやまおんなていきん

## 妹背山婦女庭訓

〔解説〕 明和八年（一七七二）大坂竹本座初演。近松半二らの合作で、全五段の時代物。当時衰退していた竹本

座がこの作品の大きたりにより盛り返したと言われるほど、人気のあつた作品です。物語は藤原鎌足親子による蘇我入鹿討伐を題材に、大和地方の伝説や謡曲、幸若舞曲などを取り入れ複雑な構成の大作となっています。

天智天皇の御代、蘇我入鹿は天皇派の藤原鎌足を失脚させ、自ら帝位につきます。入鹿は母が白い牝鹿の生血を飲んで生まれた為、超人的な能力を持っていましたが、爪黒の鹿の血と嫉妬に狂った女の血を混ぜ鹿笛に注いで吹くと、その力が失われるという宿命でもあり、ついにはその弱点を突かれて討伐されるのでした。

〔杉酒屋の段あらすじ〕 鎌足の子淡海（たんかい）は烏帽子折の求馬（もとめ）に姿を変え、三輪の杉酒屋の隣に住んでいました。杉酒屋の娘お三輪は求馬と恋仲になっていますが、求馬のもとに人目を忍んで橘姫が尋ねて来ます。

お三輪はそのことを丁稚の子太郎から聞いて、求馬の不実を責めますが、求馬はうまく言い逃れをします。お三輪は二人の仲を誓うため、七夕に祀ってあつた紅白の苧環（おだまき）の、赤い方を求馬に渡します。そこへ橘姫がやってきて、お三輪と橘姫が求馬を取り合い、さらにお三輪の母が帰ってきて、求馬（淡海）を捕まえようと騒ぎになります。

（一般社団法人 義太夫協会発行）

## 杉酒屋の段

てこそ出でて行く。

日とともに宮むさまも入相の、四方の市庫戸ざし時。

子太郎跡を打見やり、灯を上げ表の戸、夜の構への  
そこここと、こなたの道より歩みよる振りの袖の香

やごとなき、面を隠す衣かづき誰れ白絹のやさ姿。

窺ふうちに隣りの軒。知らせのしはぶき、主の求馬。

「今宵はどうしてはやりし。サア〜こちへ」

とその跡は云はず語らず手を取って、戸口立寄せ入  
る跡に子太郎は不審顔。隣りの門口耳をあて、聞き  
すまして立戻り、

「なんでも隣の烏帽子めはおれとは違うてよっぽど  
えらい色事師ぢゃわい。あいつが見事な烏帽子でア  
ノしろもの占めをると聞えた。こちらのお娘に聞かせ

たら。たいていのことぢゃあるまい。エ、はし早い  
奴ではある」

とつぶやくところへ、娘のお三輪、寺子屋戻り、足早  
に門口這入れば、

「やお三輪様戻らんしたか。サア〜ことぢゃ〜  
〜大事ぢゃ〜わいの」

「オ、あの人わいのなんぢゃいの。私にびつくりさ  
しやったわいの」

「なんぢゃやさしやったわいの、さしやったわいのど  
ころかいの。これお前に忠義を云うて聞かす」

「ム、忠義とはなんのことぢゃいの」

「エ、忠義とは忠臣のことぢゃわいの」

「サその忠臣は知ってゐるがの。それがどうぞした  
かや」

「サその忠臣はの、アノ隣りの烏帽子めが」

「隣の烏帽子とは、求馬様のことかいの」

「オ、求馬、その求馬の姿から起ったこつちやわいのう。アノナ、こちの内儀様は家主へ用があつていかしやつた。その跡へなんぢやか知らぬが、真白な絹をかつぎ、幽霊かと思うたら、美しい女の銜妻が隣りの門口こと／＼と叩いた。そしたら求馬様がつつと出て、『ようはやう来たナア』と、手に手を取つてうちへはいつた。ナントお三輪様。コリヤだまつて居られまいがな」

「そんならなんと云やる。求馬様の所へ美しい女中様が見えて、その女中様を連立つて這入らしやんと云やるのか」

「アイ、入らさんした／＼イヤモ、ぐーつと入らさんした」

「そりやマア合点のいかぬこと。幸ひかか様も留守

なれば、そなた往て求馬様をここへ連れて戻つても」

「オット合点、呑み込んだ」

と走り出でて隣りの門、破れるばかりに打ち叩き、

「コレ求馬様、隣りの酒屋から使ひに来た。今のが濟んだら、印判持つてござんせ」

と口から出次第、求馬はびつくり、『なにやらん』と立出づれば、ものをも云はず、

「マア／＼こちへ」

と無理やりに手を引連れてわが家のうち。それと見るより娘のお三輪、口に云はねど赤らむ顔。

「求馬様お帰りなされたか」

「ホこれは／＼お三輪様。寺屋へお出でなさつたげな」

と互ひに味な墨付きを、子太郎がひつ取つて、

「サア〜おれが役はもうこれまで、そこへなにかの立引きさんせ。ここらでわれら粋をとほし夜食の扶持にありつかふ。兩人ともエヘン、ソモのちに逢はう」

と納戸へ走り入りにける。跡に二人は接穂なく、おぼこ育ちの娘気に思ひ詰めたる一筋を、云はうとすれば胸迫り、

「いま子太郎に聞いたれば、美しい女中様が宵からお前へ来てぢやげな。定めてそれは隠し妻。これまでお前とわたしが仲、逢うことさへもたま〜に、千年も万年も変らぬ契りと仰しやった、その約束は偽りか。浮世の訳も弁へぬ在所育ちのわたしでも云ひ交したこと忘れはせぬ。あんまりむごい」と取り付いて、涙先立つ恨み言。

「これは思ひも寄らぬ疑ひ。なる程女中は来ている

が、あれはソレ春日の神子殿。その連合ひ禰宜殿の烏帽子をあつらへに見えたのぢや。美女はおろか、いかな天女が影向あつてもほかへ散る心はない。和歌三神を誓ひにかけ偽りはもうさぬ」

と時の間に合ひ落付かせば、さすがおぼこの解けやすく、

「神様まで誓言に、それでわたしも落付いた。必ず変つて下さんすな」

と立上つて、七夕に供へ祭りし二つのおだまき。持出でて前に置き、

「わたしが寺屋にいた時にお師匠様に聞いて置いた。殿御の心の変らぬやうに星様を祈るには白い糸、赤い糸、おだまきに針を付け結び合はせて祭るとやら」

「オゝそれがすなはち願ひの糸の乞巧針」

「ムお前もよう知つてぢやナア。白い糸は殿御と定

め、女子の方は赤い糸。それで私もこの願籠め寺屋  
で見た本の中に、心をかけし女の歌。ア、なんとや  
ら、オ、それよ『恋ひ渡る、思ひはちぢに結ばれて、  
幾夜願ひの糸の緒環』

「ホ、その男の返しには『相見ての、のちも願ひの  
糸筋を、よそへ乱すな君が小田巻』」

「アイ／＼さうでござんした。いつまでも変らぬし  
るし、赤い糸をお前に渡し、白い糸を私が持ち、契り  
も長き願ひの糸。夫婦の約束星合ひにかささぎなら  
ぬ小田巻を千代のなかだち取りかはし、肌につけ合  
ふわりなき糸にし」

求馬がうちより以前の女、歩み出でてこなたの門口。  
「隣りの烏帽子折様はこなたへ来てござるかな。許  
さつしやれ」

とうちへ入る。姿に求馬は手持ち不沙汰。お三輪は

なんの気も付かず、

「ア、あなたがいまのお人かえ」

「オイノあれ／＼神子様ぢや／＼。それで薄衣着て  
ござる。ナアもうし、お前様はアノお連合ひ様の烏  
帽子をあつらへにお出でなされましたのぢやナ。さ  
うでござりませうがな。サ、／＼さうでござります  
と紛らかす。包む詞の絹を漏る、月の笑顔をぴんと  
すね、

「コレもうし求馬様。あの女中はお端女か、なに人  
でござります」

「アノこれはこの酒屋の娘御」

「ム、そのマア隣りの娘御と最前から久しい間、な  
んの用がござりました」

と問はれて求馬は答へもなく、うぢつく素振り、見  
て取るお三輪。

「コレもうし、神子様とやらいふ女中様。人をマアお端女かなんのとひっこなしたものの云ひやう。求馬様にはアイ、私が用がたあんどござんす。お前のお世話になるまいし、構うて下さんすな」

「オ、これははしたない。そのやうに云はしやつても、そもじなどの用を聞く求馬様ぢやないわいなう。

サアお帰り」

と手を取れば、お三輪が隔てて、

「イエ〜〜、わたしがまだ用がある。いなすことはなりませぬ」

「イヤここには置きはせぬ。邪魔せずとそこ通しや」と、手を引つ立てて立出づれば、

「イヤ離さじ」

とお三輪もまた、あなたへ引けば、こなたへ引く、訳も渚にたはれる雁、つばさ振り袖ふり分け姿。恋を

争ふ、その折から、いきせき戻るこの家の母。

「ヤア求馬殿。こなさんには用がある。どっこへも遣ることならぬ。動くまいぞ」

と身構へに、何かは知らず白絹の姫は外へと出で行くを、とめる求馬に、またさがる娘を押分け母親は、

「求馬やらじ」

と引止め、繋ぐ手と手をしがらみの風に揉まるる争ひに、子太郎立出で見廻して『これ幸ひ』と母親の帯にしっかりくくつたる縄先、桶の呑み口にゆひ付け納戸へ逃げて入る。こなたは互ひに恋ひ慕ひ姿乱るる姫百合の、手を振りきれば、一時に乱れて走るを、母親が、『遣らじ』と追へば繋ぎ縄、力む拍手に呑み口抜け、酒は滝津瀬びつくり敗亡、三人門へ遅れじと同じ思ひを跡やさき、道を慕うて

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。